

今月の琵琶湖

常吉リグ、ネコリグに続く岸釣りの新テクニク発見!!

1月の琵琶湖

滋賀県琵琶湖のバスの岸釣りで、この半年ほどの間にワームの胴体をチョン掛けにするアングラーが急に多くなった。こういうワームのセットの仕方をワッキーリグと言つが、琵琶湖では何年も前から同様のリグがネコリグの名前でよく知られている。

ネコリグを琵琶湖でポピュラーにしたのは、有名な常吉リグの発案者である村上晴彦さんだ。今から10年近く前のことだが、雑誌で最初に常吉リグのことが取り上げられた当時、村上さんはすでにネコリグも同時に使っていた。雑誌でも相前後して取り上げられたのだが、先に有名になったのは常吉リグの方で、ネコリグの普及は何年も遅れた。なぜかということ、常吉リグは誰にでも簡単にバスが釣れるリグであるのに対して、ネコリグの方はある程度の使いこなしを要し、基本的にはより釣りにくいバスを釣るためのリグだからだ。

それがなぜ今になってネコリグが脚光を浴び始めたのかというと、バスが釣りにくくなったからにはかならない。もはや常吉リグは誰でも使ってるわけだから、バスはすっかりなれてしまっている。ネコリグの見慣れないアクションにより積極的にバスが反応するのは当然のことだし、常吉リグでは手が出ないポイントに従来よりも繊細に釣ることが可能になった。というわけで現在の琵琶湖の岸釣りはネコリグやワッキーリグがたいへんなブームになっ

ているわけだが、当の村上さんはすでに、さらに進んだリグを使った新しい釣り方に注目している。そのリグとは、環付きのマスバリの軸の部分にこく小さなスプリットシンカー（村上さんはガン玉オモリを使っている）を打ち、このフックで3インチ前後のワームをチョン掛けにする。ラインは2ポンドと極細だが、それでもなれないとキャストするのに苦勞するほどの超軽量リグだ。

これを狙うポイントにキャストしてボトムまで沈ませ、あとはロッドティップを小刻みに上下させながら、たるんだ分のラインだけをリールで巻き取る感じでこくゆっくりと引いてくる。つまり、ワームがボトムにかすかに付いているかいないかの状態でアクションさせ、ラインも限りなく張ってるか張ってないかの状態にして、スレバスをだまそうというわけだ。名付けてフワ釣り。「この釣りはまだ開発中で、現在は完成途上の仮の姿だ」と村上さん自身が言っているが、これから先、さらに釣りにくくなっていくであろう岸釣りのバスを攻略するには使えそうなテクニクである。

年末年始の雪と1月中旬の温かい雨の影響は？

2月の琵琶湖

昨年10月から続いていた滋賀県琵琶湖の水位の低下が1月中旬になってマイナス60cm台半ばに達したところようやく落ち着き、雨が降り続いた15日から16日にかけてわずか数cmではあるがピクリと上昇した。

琵琶湖南部の周辺では、ほとんど毎年1月半ばにまとまった雨が降る。この雨をきっかけ

に、それまで下がり続けていた水位が上昇に転じるのだが、お正月が明ける頃から20日頃までの間に雨が降る確率はかなりのもので、ここ10年以上の記憶をたどってもほぼ例外なく雨が降り、それ以降、水位は春まで上昇し続けている。

それが昨年1月は大量の雪が積もった後の雨だった。冷たい雪解け水が流れ込んだために水温が一気に下がり、琵琶湖のバス達は沈黙してしまった。1月中にさらに雪が降って水温が下がり続けたために、まともにバスが釣れるのは北湖の港ぐらゐのものになってしまった。この冬は、その雪が年末年始に降り、いつもよりも一足早く水温が下がったようだ。普通なら1月中旬頃までは岸釣りでもボート釣りで常吉リグなどのソフトベイトでそこそこはバスが釣れる冬の初めのパターンが成立する時期がしばらく続くものだ。ところがこの冬に限っては、それを飛ばして真冬のパターンになってしまい、早くも1月始めにはリップレスミノメタルジグなどでバスを誘って反射的に飛び付かせるような方法でないと釣れなくなってしまったのだ。

そこへもってきて1月中旬になっての雨と水位の上昇である。気温も上昇して3月下旬並みの暖かい日が続き、溪流釣りの解禁頃に降る菜種梅雨のような暖かい雨が1月に降った。もちろん、こんなに暖かい日が続くわけもなく、いつかは寒くなり2月から3月始めには琵琶湖とその周辺が1年間でもっとも寒くなる季節がやってくるはずだが、1月上旬から中旬にかけての気候変動がこれから先の真冬のバスフィッシングにどういった変化をもたらすだろうか。

確かに北湖の港ではバスが釣れているが、本格的な釣れ方にはもう一息だ。港外の水温があともう少し下がり、湧き水がたまって温かく保たれる港内との水温差がはつきりとしてくれば、たくさんのバスが港内に入り込んで本格的によく釣れるようになる。それがこの冬は例年より早まるのではないかと予想していたのだが、どうやら予想通り順調に進みそうにならな状況になってきた。

かと言って、冬の琵琶湖のバスフィッシングは、暖かい雨が降ったり、暖かい日が続いたからと言って、急によく釣れるようになるなんてことはまずない。へたをすると、港の外のバスは釣りにくい、港の中にはバスが少ないという、きわめてどっち付かずの状況が続いてしまう可能性もあるから、そのあたりのことをよく理解した上で攻略する必要がある。いったんリップレスミノメタルジグの釣りに移行したからには、この先もソフトベイトはきつぱりとあきらめて、バスが反射的に飛び付くのを狙う釣り方に徹した方がよいのではないだろうか。港の外で釣る場合は、わずかでバスの活性が上昇するチャンスを見逃してはいけない。そのタイミング、場所のどちらかを間違えただけで何も釣れない結果になってしまうというぐらゐの覚悟を決めてかかる必要があるだろう。港内ではルアーのアクションをできるだけいいにすること、かすかなアタリを見逃さないこと。ほかのアンギュラーが釣れないバスを釣るためには、何よりもこの2点を極めることだ。

雪が少なく絶不調の琵琶湖 春の準備をお早めに

3月の琵琶湖

この冬の滋賀県琵琶湖周辺は、例年にくらべると雪がたいへん少ない。この時期の湖北の

釣り場は、湖岸に数cmの雪が積もっているのが普通だ。そのため、車を停める場所がないわ、湖岸に近付くのはたいへんだわで、なかなか思うように釣りができないのだが、この冬に限ってはそういうことがまったくない。駐車場は広々、湖岸にも楽々アプローチできて、どこでも好きな所で釣りができる。

ところがである。雪が少ないのはけっこうなのだが、バスフィッシングは例年になく不調なのだ。これは岸釣りもボート釣りも様子はかわらない。岸釣りは港の中に集まるバスが少ないようで、なれたアングラーが手を尽くしても魚の顔を見るのがやっと、数釣りなんてとんでもない状況だ。

普通なら12月末から1月中頃には港内の漁船の陰などに小バスの大群が浮いているのが見えるようになる。それがこの冬は、2月に入ってやっと見えるようになった。この小バスに続いて、25~30cmのバスが釣れるようになるのが1月末から2月初め頃なのだが、この冬はその兆候がまったく見られない。釣れないまま冬が終わってしまうのではないかと心配してしまうほどだ。

ボート釣りの方はもっと厳しい状況である。バスプロやフィッシングガイドなどトップレベルのアングラーが釣りをしてもノーフィッシュがちつともめずらしくない。たまに釣れば25~30cmとサイズはよいのだが、そういうのに当たらなければ、アタリも何もなしというのがあたりまえの厳しさなのだ。

そんな状況の中、このコーナーにたびたび登場しているリブレフィッシングガイドの河畑文哉プロが2月8日に47cm、9日に50cmと立て続けにグッドサイズのバスをキャッチした。

それもなんと、ロングビルミノーのDバスワレル79を使って、水深2m台のシャローウォーターで釣ったのだ。

ということとは、つまり、大きなバスはすでに春の産卵に向かって浅場へ動きだしているということなのだろうか。現時点でそう決め付けるのは早過ぎるかもしれないが、2月末から3月初めにかけても雪が降らないまま季節が進むようだと、そう判断して早めに春の釣りに切りかえた方がよいかもれない。

港の岸釣りは上層の水温が上がりに始める季節なので、それにつられて浮いたバスを狙う小型サスペンドシャッドやミノーなど、ここ数年不振だった釣りが復活する可能性がある。例年より遅れてバスが港の中に集まり、上層の水温が上がりに始めるタイミングと重なれば、そういうことが起こる可能性が大いにある。つまりこれも春の初めの釣りというわけで、岸釣りもボート釣りに春に向かっての準備を早めにした方がよさそうだ。

スポーニングが早くて釣るのが難しい春の原因と対策

4月の琵琶湖

今年のサクラの開花前線は、例年より10日前後早いペースで日本列島を北上しているようだ。滋賀県琵琶湖周辺のサクラも、例年よりもずいぶん早く、一部は3月前半に花を開き始めている。中でも早かったのは、大津市北部の堅田と衣川の境を流れて琵琶湖に注ぐ天神川沿いの桜並木だ。3月9日にはすでに三分咲きになり、写真を撮りに行った14日には五分咲きを通り越して七、八分咲きになっていた。

琵琶湖周辺のサクラの開花は、大阪あたりとくらべて1週間から10日遅く、例年4月中旬頃に満開になる。北部ではさらに遅く、海津大崎のサクラが満開になるのは4月後半のことだ。それが3月の下旬に、1本や2本だけではなく、天神川沿いの^⑧本ぐらいの並木全体が咲き始めたのだから、これってどう考えても異常な早さだ。

その天神川のサクラが開花し始めたのと同じ頃、雄琴や堅田のサクラはまだつぼみが硬くて、ぜんぜん咲きそうな気配もなかった。15日頃になって、ようやく天神川以外でもちらほらと開花しかけたサクラを見るようになったが、まだつぼみが硬いままのサクラも多い。場所によって、木によって開花時期にかなりのズレが出て、3月末頃になってようやく開花を始めた、開花はまだまだ先というサクラもあるかもしれない。

このような季節的なズレはバスフィッシングにも通じるものがある。それは前回のこのコーナーで「春の準備をお早めに」と書いた通りだが、それに加えて用心しないといけないのは、春の産卵に向かってのバスの動きが例年より早く始まった年は、決まって産卵シーズンの釣りが難しくなるということだ。

なぜそういうことになるかというと、一部のバスはすでに産卵を始めているのに、他のバスはまだ産卵の準備段階だったりというようなズレが生じるからだ。その結果、どんな場所でもどんな釣り方をすればよいのかということを絞り込むのが難しくなってしまう。

さらに加えて、春のバスの動きが早く始まったからといって、その分早く終わるわけではないということがある。そんな年でも例年と同じ頃まで産卵行動をしているバスがたくさんいて、バス全体の動きを見ると産卵行動がダラダラと細く長く続いているように見えるのだ。

そのため、ある釣り場、釣り方にはまって釣れる可能性のあるバスの数は少なく、さざ波のようにバラバラとしか釣れない。つまり、釣りにくいということになる。それよりは、産卵行動が遅く始まって、一気に大波のようにバスが動く春の方が場所も釣り方も絞り込みやすく釣りやすいのだ。

それでは、このような釣りにくいバスをどうやって釣ったらいいのだろうか。岸釣りの一例をあげると、産卵でアシ原に入っているバスをテキサスリグやラバージグで狙おうとするのであれば、徹底してその釣り方を押し通して釣れる場所を探す。完全に早過ぎるとか、遅過ぎるといふことでなければ、ダラダラと続く分、その釣り方で釣れるバスがどこかにいるはずだから、それを根気よく探そうというわけだ。

自分が釣りをしている場所に他のアングラーがまったくいないからといって、釣れないわけではない。そういうほかのアングラーが見逃している場所に大当たりのチャンスが転がっていることが、この春のようなシーズンには多い。それも、4cmも50cmもあるビッグフィッシュをゲットするチャンスが……。そのことを忘れず、あとは自分の釣りに信念を持ってチャレンジしてほしい。

異常づくめの春。早くも3月末には大釣りのチャンスか!?

4月の琵琶湖 改訂版

今年にはサクラの開花が異常に早く、東京では3月15日に開花宣言があった。これは例年より12日早く、観測史上もっとも早いとのこと。滋賀県琵琶湖周辺でも、大津市北部の堅田と

衣川の境を流れて琵琶湖に注ぐ天神川沿いの桜並木はなんと3月上旬に花が開き始め、17日には満開になって花びらが舞い始めた。

琵琶湖周辺のサクラの開花は、大阪あたりとくらべて1週間から10日遅く、例年4月中旬頃に満開になる。北部ではさらに遅く、海津大崎のサクラが満開になるのは4月後半のことだ。それが3月上旬に、1本や2本だけではなく、天神川沿いの20本ぐらいの並木全体が咲き始めたのだから、これってどう考えても異常な早さだ。

バスフィッシングの方も例年よりはるかに早いペースで季節が進んでいる。すでに2月下旬の時点で、浅場でクランクベイトやロングビルミノーにバスが反応し始め、その後、例年よりも2、3週間早いペースで春の釣りが進行しているのだ。

こういう風に、春先の時期の釣りが例年より早く始まった年は、その後の釣れ具合が不順になることが多い。春が早く始まったからと言って、その分、早く終わるわけではなく、バスの産卵行動はたいは例年と同じ頃まで続く。その間延びした分だけ、パターン変化がゆっくりダラダラと起こる。つまり、バスの産卵行動が散発的に起こるようになってしまつので、アングラーにとっては釣り場や釣り方をたいへん絞り込みにくくなつてしまつのだ。

著者は3月上旬頃までのバスの釣れ方を見ていて、今年の琵琶湖の春もおそらくそういうことになるのではないかと思つていた。ところが、その後、著者の予想を覆すようなことが次々を起つたのである。

まず、3月まじめ頃まで浅場でクランクベイトを使ってビッグフィッシュを立て続けに釣つていたりプレフィッシングガイドの河畑文哉プロから、12日から14日のガイドでは同じ釣り方で30cmクラスが数釣れるようになったという報告があつた。さらに、同じリプレフィッシングガイドの杉戸繁伸プロらも17日に30cmクラスを2人で20尾以上キャッチし、さらに場所をかえて同行の大地昭政さんが50cmジャストを上げた。

岸釣りでは16日に松井悟さんが真野漁港付近で50cmの大物をキャッチ。南湖のあちこちのポイントでは30〜40cmが釣れるようになっていた。

このような状況を見ると、春が早く始まった年はその後の釣りが難しくなるという定石が今年に限ってはあてはまらないかもしれないと思えてくる。ひよっとしたら、早く始まつた春が一気に進んで、早く終わつてしまつことになるかもしれない。そうなること、この原稿が掲載される3月末から4月初め頃は、まさに春真っ盛りの大釣りのチャンスになっている可能性が大いにある。

ということ、このタイミングをくれくれも見逃さないようにしていただきたい。他のアングラーが気付いていない分、ビッグチャンスかも。

岸から狙うなら、思い切った浅場でシャロークランクベイトかスピナーベイトを引くが、アシ原をテキサスリグ、ラバージグなどで攻めてみよう。うまくタイミングが合えば、それこそ何年かに1回の大釣りのチャンスに出合えるはずだ。

南湖はドアフター。北湖のブリスボーンに期待したいゴールデンウィーク 5月の琵琶湖

前回のこのコーナー（4月の琵琶湖改訂版）で、滋賀県琵琶湖のバスフィッシングは、春の季

節の進み方が早い影響で、パターン変化も大幅に早まるという予想を書いた。蓋を開けてみれば実際にその通りで、南湖では産卵に向かうバスの浅場への動きが例年より2、3週間も早く始まり、4月上旬から中旬にかけてが産卵行動のピークとなった。

「トーナメントが開催されていた4月12日、名鉄沖はボートが密集状態になっていた。そのボートのほとんどが岸にくく近い所で釣りをしている。つまり、それだけバスが岸寄りの浅い所に集まっているということで、浅場でのバスの産卵にドンピシャリのタイミングでトーナメントが開催されたわけだ。

問題は、この後どうなるかだが、バスの産卵行動は湖の全域でいっせいに行われるものではない。広い琵琶湖の南と北では何週間も差があるし、南湖に限っても1週間から10日の差がある。

南湖のバスの産卵は早い所ではすでに終わっているし、遅い所でも4月末まで続かないだろう。ゴルデンウィーク頃の南湖は、産卵に疲れ切ったバスの体力がまだ回復していない、一番釣りにくい時期にはまる確率が高い。

それなら南湖はゴルデンウィーク頃がちょうどいいタイミングになるんじゃないかと期待したいところだが、これがまた微妙。4月中旬現在の南湖の水温は、沖合でやっと10度を越えたばかりで、南湖が15〜16度もあるのにくらべるとずいぶん低い。この水温がどれくらい上昇するかで状況が大きくかわってくる。

4月中旬までの状況から見て、ゴルデンウィークころの南湖で一番有望なのは、アシ原などに立ち込み、その沖側に近付いてきてるバスをノーシンカーのソフトスティックベイトなどで狙う方法だろう。場所によってはスピナーベイトやバイブレーションプラグ、シャロークランクベイトなどが有効かもしれない。どんなルアーを使うかは、バスがどれくらい浅場まで近付いてきているかと、藻や障害物が多いか少ないかで決めればよい。

こういう釣り方はまれば、今年のゴルデンウィークの琵琶湖北湖は、本当のゴルデンウィークになる可能性がある。もし、そうでなかったら……南湖は終わった後、北湖は始まる前という谷間のどん底にはまる可能性もあるが、それでも皆さんがせっかくの休みに釣りなかないということはないはず。どうせ行くなら、一発大当たりを狙ってみてほしい。今年のゴルデンウィークの琵琶湖北湖は、そんなチャンスがけっこうありそうな気がするのだが、この予想、前回同様、大当たりするだろうか。

琵琶湖と池原ダムで連日50UP。河畑文哉プロだけなせ釣れる

6月の琵琶湖

リブレフィッシングガイドの河畑文哉プロがこのところ絶好調。滋賀県琵琶湖でも奈良県池原ダムでも立て続けに50cmオーバールのバスをキャッチしている。

池原ダムでは5月9日に54.5cm、10日に51.5cmと56.5cmをキャッチ。琵琶湖では15日に50cmと56.5cm、16日に50.5cm。いずれもゲストが釣った分を合わせた成績だが、釣りに出た日のうち50cmオーバーを釣らない日よりも釣る日の方が倍くらい多いというすごい確率だ。もちろんその間、50cmオーバーが釣れない日でも、50cmにわずかに届かない魚はたくさん釣っているのだから、50cm前後でいじめるならほんと毎日釣っていることになる。



河畑プロが池原ダムでフィッシングガイドを始めたのは今シーズンからで、本格的にガイドがスタートするまでは「琵琶湖とかけ持ちで、お客さんにちゃんと釣ってもらえるんだろっか」などと心配していた。それが蓋を開けてみれば現在の好調ぶりである。これにはさすがと言っほかないが、釣り方はいたってオーソドックス。特別にかわつたテクニクなどを使っているわけではない。

釣っているポイントは自然湖の琵琶湖と人造湖の池原ダムではまったく異なる。琵琶湖は沖の水深2〜3mのウイードエリア。池原ダムは湖岸沿いの切り株や立ち木、ブッシュなど。池原ダムのビッグバスは産卵のために浅い所へ上がってきたのを目で探して釣るアングラーが多いが、河畑プロは見えバスをほとんど釣っていない。これは意識的に見えバスを避けているのではなく、ゲストの希望の合わせて見えバスを狙ってみることもあるが、見える魚は釣りにくい格言通り、河畑プロのテクニクを持ってしてもなかなか釣れない。それよりも普通に釣ってて大きなバスが釣れる確率の方がはるかに高いのだそつだ。

メインルアーはジグヘッドリグとダウンショットリグ(常吉リグ)で、ジグヘッドリグにはパークレイのヌードルまたはジャツカルのダーツ4インチをセット、ダウンショットリグにはパークレイのパワーホグ3インチをセットして使っている。琵琶湖では5月前半までダウンショットリグでも釣れていたが、現在はジグヘッドリグの方がよいとのこと。

確かに琵琶湖も池原ダムも日本屈指のバス釣り場だが、それだけバスアングラーも多く、大きなバスが簡単に釣れるということはない。そこでこれだけの成績を上げることができる理由を河畑プロに聞いたら、次のような返事が返ってきた。

「琵琶湖はアタリが本当に少ない。池原は琵琶湖よりも数釣れるけど、それでもアタリがたくさんあるわけではない。問題はそれをきっちり釣ることができるかどうか。これは自分が選んだ場所や釣り方が正しいと信じてやり切るしかない。大部分のアングラーは、ちょっとアタリがないとあきらめてしまっけど、それでは釣れない。今の時期は正しい釣り方と場所を選んだら、あとはどれだけ根気よくがまんできるかが勝負になる。琵琶湖も池原もバスはたくさんいるんだから、ちゃんとやってれば釣れますよ」

バスがトップで釣れそつで釣れないときの新対策

7月の琵琶湖

バスが水面を意識してはいるのだが、いまいちルアーには出切らないというところがある。トップウォータープラグを見に来るが食い付かない。あるいは、姿が見えているバスのすぐそばにルアーを通すと、一瞬ルアーの方を向くが、深追いしてこないというようなケースだ。

こういうバスを釣るための代表的なテクニクとして、ノーシンカーリグにクラブをセッ

トしてテイルをヒラヒラさせながら水面を引いてくるという方法がある。同じノーシンカーリグでもストリート系のワームをセットした場合、バスがいると思われる所の水面上までスイスイとワームを泳がせてきて、バスの目の前に来たところでラインを緩めて沈ませてやる。

トップウォータープラグに食い付かないバスが、これで一発で釣れることがある。つまりバスに与える刺激をかえてやるわけで、いずれもトップウォーターゲームの好機である梅雨時期に忘れてはいけない欠かせないテクニクだ。

さらにもう一つ、今年の梅雨から新しい釣り方が加わった。6月

上旬にジャッカルから発売されたバニーというプラグを使った釣り方なのだが、これが、ただ投げて引くだけと至って簡単。それだけのことで、他のルアーには反応しなかったバスがどこからともなく現れてきてパクツと食い付くから、あーら不思議である。

一見、お尻が太く太くずんぐりむっくりとした形のクランクベイトにしか見えないバニーをキャストし、深く潜らないようにロッドを立てながら水面直下を引いてくる。すると、他のルアーではとても起きないような強い引き波が立つ。この引き波がバスに対しては、これまでになかった刺激で、思わず反応してしまつたらしい。

このバニーを使えば面白そうな釣り場の例としてあげておきたいのが奈良県の七色ダムだ。周年、水位が安定している七色ダムは、湖岸の立ち木が水面に覆い被さり、その下の陰

にバスが付いている。このバスをどう釣るかというときに、バニーが新しい武器になつてくれそうなのだ。

難しいことを考えずに、木の枝の下にどんどんバニーを投げ込んで引いてくる。これだけのことで数釣れれば、さぞ爽快な釣りじゃないかと思うのだが、やってみるならなるべくお早めに。なにしろ今時のバスは、新しいルアーになれるのも早いですからな。

それと、ふたまりほど小型のベビーバニーも追って発売されるとのことだ。こちらの方は野池などでぜひお試しあれ。

台風2連発の急増水と濁りがサマーパターンにどう影響するか

8月の琵琶湖

7月に入って二つの台風が相次いで近畿地方に接近した。10日の台風6号と15日の台風7号である。いずれも梅雨時期の台風らしく大量の雨を降らせ、各地に大きな被害が出た。釣り場への影響も甚大である。

北寄りに展開していた梅雨前線が台風で活発化されたことにより、各地で洪水の被害が出た。この梅雨前線の端っこが滋賀県に引っ掛かっていたため、琵琶湖周辺にも大量の雨が降り、水位が急上昇すると同時に泥濁りがほぼ全域に広がってしまった。

雨は滋賀県東部と南部に集中したため、湖東に流れ込む野洲川や愛知川の濁りが特にひどい。そのため毎年夏場のバスフィッシングの好ポイントになる沖島周辺などはアマゾン川のような水質になってしまつている。それ以外にも急な増水で濁つた川が多く、消火栓から流

入する濁りで局地的にひどい水質になってしまった所があちこちにできている。その沖合には薄茶色の濁りが広がり、岸から何キロ離れても水質がクリアにならない状態だ。

奈良県池原ダム周辺にも大量の雨が降り、下がっていた水位が一気に回復した。こちらは減水がひどくて一雨ほしいところだったので、まさに恵みの雨と言ってもいいくらいだが、水位が100以上も一気に入上昇したのと、本流である北山川のバックウオーターから濁った水が流れ込んだため、やはり影響は小さくない。特に梅雨から初夏にかけて好ポイントになる本流の上流部が濁ってしまったのが痛い。

二つの台風がもたらした大雨が、これから夏に向かってどのように影響するかわだが、琵琶湖も池原ダムも水況が落ち着いてバスが濁りに慣れてくれば、よく釣れるようになる可能性がある。そのタイミングは、海の日の連休頃から8月初め頃までの間になりそうだ。

琵琶湖はその後も影響が残って、今年は本当の夏のパターンがなかったということになる可能性もある。真夏らしいディープウオーターパターンやストラクチャーのシェード狙いよりも、水深3〜4mのウイドエリアのアウトサイドエッジを狙った方がバスがよく釣れるという中途半端な夏になる可能性が大きい。

池原ダムは最初のうちは濁りを避けて釣った方がよいはずだが、しばらくたつたら思い切った逆の発想をしてみよう。バスが濁りになれてくると、「こんなひどい濁りの中で」と思うような所で意外と大きなバスが釣れたりするから、タイミング次第で狙ってみるのも悪くないと思う。

その後の池原ダムは、次第に通常のサマーパターンに移行するものと思われるが、それでも早朝のトップウオーターとか日中に意外に浅いタナで釣れたりとか、そういうパターンがいつまでも残る可能性はある。

地球温暖化や天候異変などで、これから先、今年のように台風が立て続けにやってくるようなことが多くなるかもしれない。そのなつたときにバスフィッシングのパターンを考えるには、今以上に柔軟な発想が必要になるはずだ。この夏は、そのシミュレーションシーズンになりそうな気配濃厚である。

エルニーニョと日本のバスフィッシングの関係

9月の琵琶湖

前回の話題は台風がもたらすバスフィッシングへの影響だった。今回はさらに話を大きくして、エルニーニョの影響について書かせていただきたい。

気象庁は8月中旬、エルニーニョ現象が発生の初期段階にあり、少なくとも年内は続くという予想を発表した。この発表を聞いて、「今頃何を言ってるのか」と思ったのだ。

6月にグアムヘカジキ釣りに行ったときに、すでに現地のアングラーの間でエルニーニョのことが大きな話題になっていた。今シーズンのグアムはカジキだけではなく、カツオもとても少ない。おまけに近くで台風が次々と発生して大荒れの天候が続いている。それがエルニーニョのせいだというのだ。

話を日本の釣り場に戻そう。エルニーニョ現象が起きると、日本では冷夏、暖冬の傾向があるとされている。これが本当かどうかはわからない。京阪神で連日30度を越える最高気温

が記録されているのは、エルニーニョによる冷夏の傾向と温暖化が相殺した結果だろうか。

そんな都会の暑さから逃げ出してバス釣り場を訪れると、夏らしくない釣れ方をしているところがあちこちにある。奈良県池原ダムは7月下旬に台風の影響で増水してからというもの、8月に入ってからもずっと1人平均2尾前後、多いアングララーは3尾という、ここ数年のサマーシーズンにはとても考えられなかったような釣れ方をしている。滋賀県琵琶湖でも、水温が例年より高い北湖の水深2メートルのウイードエリアで1人で3尾も釣ったアングララーがいる。

いずれもバスが釣れている水深が浅いのが特徴で、これは典型的な冷夏のパターンだ。そのことをもう一步踏み込んで考えると、このまま夏のディーブパターンがやってくることなく、秋の初めのパターンに移行していく可能性がある。現時点でそこまで予想するのは気が早過ぎるかもしれないし、釣り場による違いも考慮する必要があるのだが、そういうことを頭の隅に置きながら釣りをしていただければ、他のアングララーに先駆けて大当たりのパターンを見付けることができるかもしれない。

エルニーニョが起こっているという一つの情報が、このような思考のヒントになる。釣れない原因探しなら「潮が悪い」と言っていればいいのだから、ことは簡単だ。そうではなく、自分の力で魚を釣るためには、有益な情報を多く集めるとともに、はるか遠くで起こっているエルニーニョのような自然現象をも自分の釣り場に取り込んで考えようとする態度が欠かせない。

同じ釣りをするなら、その方が面白いというのが、釣りという遊びに対する著者のスタンスだ。その点でグアムのアングララーに一步先んじられたのと、日本の気象庁は今頃になってしまったという、今回はワールドワイドな話題をお届けした。次回は宇宙的な観点からバスフィッシングを論じてみたいと思うのだが、これは著者の情報収集能力ではしよせん無理なことだろうか。

アングララーが多い秋の連休を賢く乗り切るための方法

10月の琵琶湖

この秋は9月から11月までの祝祭日がすべて週末にくっ付いた連休になっている。土曜日と合わせて3連休が多いのが特徴だ。

その最初の連休となった9月14日から16日の3日間、奈良県池原ダムを訪れたバスアングララーは日によって極端に多かつたり少なかつたりした。アングララーが最も多かったのは3連休中日の15日で、レンタルボート店は予約で一杯、昇降業者もいっぱい降ろしていて、最盛期のゴールデンウィークにも負けないにぎわいとなった。池原ダム全体で300隻くらいはボートが出てたんじゃなくかという話もあったくらいだ。それに比べると、連休初日の14日は半分くらい、最終日の16日はそのさらに半分以下だった。

連休の特定の日にはアングララーが集中する傾向は、ここ数年、特に顕著になりつつある。池原ダムに限らず、またバスフィッシングに限らない釣り一般にも共通する傾向のようだ。このパターンを読むことができれば、アングララーが少ない日も予想できるはず。これって釣りに行くのにとても有利なんじゃないかということも少々考察してみたい。

例え休みが長期であつても、何日も続けて釣りをするアングラーは減る傾向にある。これは不景気の影響がもしれない。それでも連休中の1日ぐらいは釣りに行こうというアングラーは少なくない。それが特定の日に集中する。問題はその日がいつかだ。

連休の最後の日ぐらゐ家でゆっくりしたいとは誰でも思う。だから最終日はアングラーが少ない。これは休みが長期に渡るほどはつきりしている。

池原ダムではレンタルボート店や昇降業者のトーナメントがなぜか5日に集中して行われた。多くのアングラーを集めるトーナメントや釣り大会は2連休なら初日、3連休なら初日か中日に開催されることが多い。こつこつ日は避けるに越したことはない。

池原ダムのすぐお隣の七色ダムでは、アングラーの多さが3連休を通じて池原ダムよりも平均していた。これはレンタルボートの総数や昇降業者のキャパシティーが池原ダムにくらべて小さく、その分3日間に分散したということだ。

このことから次のように考えられる。アングラーの需要がレンタルボート店などの供給を上回る人気釣り場は連休を通じてアングラーが多い。不人気釣り場は連休でも空いている。微妙なのは、池原ダムのように需要と供給がバランスしているか、供給の方がやや上回り気味の釣り場だ。こつこつ釣り場で、先に書いたような理由から、連休の特定の日にアングラーが極端に集中するという現象が起こるのではないだろうか。

そこで対策だが、人気釣り場はなるべく早くレンタルボートなどを予約するしか方法はなない。この場合、行けるなら連休のうち早めの日、できれば初日がベスト。日を追うにつれ、連休のプレッシャーを受けて魚が釣れなくなっていくことをお忘れなく。

特定の日にアングラーが集中する釣り場は、レンタルボート店などに予約状況をよく聞いて、なるべく空いている日に釣りに行こう。それが無理なら最終日。釣り難いのを覚悟で行くのなら、アングラーがむちゃくちゃ多いよりは、空いてゆっくり釣れる方が気持ちがいいというものだ。

琵琶湖バスのリリース禁止条例が滋賀県議会で可決成立。その影響と環境問題への危惧

11月の琵琶湖

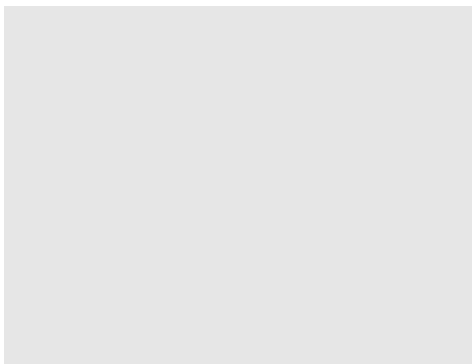
琵琶湖で釣ったバスのリリースを禁止する「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」が滋賀県議会9月定例会の最終日となった10月16日に可決成立した。同条例が釣りに影響する部分は次の通り。

- 1 法律で指定されたバス、ブルーギルを含む外来魚の琵琶湖への再放流の禁止
- 2 サイクルエンジンの2008年4月からの使用禁止（既所有の2サイクルエンジン付きプレジャーボートは2008年4月から使用禁止）

さらに加えて同議会12月定例会では「湖面利用税」についての審議が行われる予定。滋賀県から発表された湖面利用税の概要によると、琵琶湖での船舶利用者に向け出義務を課し、1隻あたり年間3000～30000円を徴収することになっている。

これらがすべて施行されると、バスアングラーは次のような影響を受けることになる。

まず、琵琶湖で釣ったバスをリリースできなくなる。釣り上げたバスは持って帰って食べ



るが、県が設けた回収用の入れ物に入れるか、そうでなければ他の生ゴミと一緒に捨てるかしないといけない。ボート釣りに、さらに二重の制限が加わる。2サイクルエンジンは2006年4月から使えない。すでに所有しているものでも2008年4月からは使えなくなるので、現在の愛艇を琵琶湖に浮かべて釣りを楽しもうと思えば、4サイクルエンジンに載せかえるしかない。

湖面利用税については現段階で細かいところがどうなるかまではわからないのだが、県発表の概要通りだと、これまたやっかいなことだ。前もって登録しておかないといけないということは、「来週の連休は天気がよくさうだから、ひさしぶりに琵琶湖へボートを持って行って釣りをしようか」なんてことはできなくなる。年に数回しか琵琶湖で釣りをしないボートアングラーでも1年分の利用税を支払わないといけないということになったら、彼らは事実上閉め出されてしまうだろう。

そんな状況を知ってか知らずか、体育の日がらみの3連休中日の10月13日は快晴微風的好天に恵まれたこともあって、この秋一番ではないかと思われるほど大勢のバスアングラーが琵琶湖で釣りをしていた。釣り場の混雑は3連休の中日が一番ひどく、初日がそれに次ぎ、

最終日は大したことないというのは、前回のこのコーナーで解説したパターン通りの結果であった。

右ページの写真はその13日に撮影したもので、場所はバスの岸釣りではトップクラスの人気釣り場である近江舞子の石積み突堤。このポイントでバスがよく釣れるようになるのは、例年11月後半頃になってからのことだが、すでに足元には小型のバスがたくさん見えているし、中には30cm近いですませずのサイズもいた。

この日はたくさん釣ったアングラーで10尾ほど。普通は2、3尾も釣ればよい方で、さすがにこれだけ混み合うとノーフィッシュのアングラーも多い。それでも今の時期、連休の混雑中であることを考えれば、まずまずの結果だ。

現在、琵琶湖の水位、水温ともにグングン下がりに続けていることを考えれば、この冬の岸釣りは意外と早く好シーズンを迎えるかもしれない。せめて、リリースを禁止する条例が施行されるまでの間だけでも、バスがよく釣れてほしいものだ。

注 サンケイスポーツ紙の連載終了にともない、今月の琵琶湖は2002年11月が最終回になりました。最終回の原稿は、内容の一部がサンスポの紙面では削除されています。ここに掲載した原稿は、著者が書いた通りのものです。さらに、サンスポに出稿した原稿は著者が最初に書いたものを大幅に書きなおしたものでした。最初に書いた原稿はEditorial Vol.91(55ページ)掲載し、なぜこういうことをしたかという説明も加えさせていただきました。